

ありの方かと思えます。タイ語で「こんにちは。」(女性形)と書かれています。

4年生で来日するまでこのような文字で読み書きし、生活していた現在6年生のNさん。初めてひらがな、漢字等を見たとき、そして、それらを使って生活し学習しなければならなくなったときの気持ちは、私たちが想像する以上のことだったと思えます。本校には外国籍を有する児童は40名余りいますが、タイ国籍はNさんのみです。明るい性格で友だちとも積極的に交わり、寂しそうな素振りも見せず日本語もみるみるうちに上達したNさんですが、自分の国に興味・関心があり、タイ語を話せる藤巻優美さんに出会ったときのうれしさ、心強さも計り知れなかったことでしょう。初日のNさんの表情は今でも鮮明に思い出されます。藤巻さんと過ごした時間は、Nさんの小学校生活のすばらしい思い出になったことと思います。遠路お越しいただき何のお礼もできずに恐縮している私たちに「とてもよい経験をさせていただきました」という、藤巻さんの言葉と笑顔には頭が下がる思いです。このようなボランティア支援をいただきまして本当にありがとうございました。



●HANDSnext vol.16(2014年2月14日)

### Yくんの母語を生かした学習支援について

大学院国際学研究科2年 耿 蘭竺

Yくんの母語を生かした学習支援を始めたのは昨年の5月からです。12月まで約7か月間に週に1回、Yくんがいる県内の小学校に行って学習支援を行いました。学習支援の対象となるYくんは現在小学校5年生で、今回の学習支援が始まった時は日本語の日常会話には特に問題はないが、教科学習が難しいという状況でした。特に、書くことに大きな抵抗がありました。一般に、日本語指導が必要な子どもに対する支援は日本語で行うのが多いと思えます。しかし言語形成期にいる子どもにとっては、持っている母語力を維持あるいは伸ばしないと、日本語がまだ十分に習得していないうちに、母語を忘れてしまい、思考言語を

喪失する状況に陥る可能性が高いです。なので、今回の学習支援はYくんの母語、中国語を活用しながら、教科学習についていけるようになることを主な目的にしました。以下、各時期の支援実態を紹介します。

1学期目のより高い日本語力が必要とされる社会と国語は取り出しで、他の教科は入り込みで学習支援を行いました。始まったばかりの時、学習支援がうまくいかなかった時が多かったです。一番難しいと感じたのは、授業中に先生が言っている内容に対してはどこがわからないのか、なぜわからないのかなどの把握です。言語の問題なのか、学力の問題なのか、それとも両方なのか。その判断にとても時間がかかりました。1学期目が終わったところ、Yくんは取り出し学習支援に少し慣れてきた様子に見えました。夏休みの1ヶ月間を利用して、宿題をもとにして1学期目のポイントの教科内容をテレビ電話で学習支援を続けました。週に2回、毎回1時間くらいをかけて、Yくんが理解することが難しい内容に対しては母語で説明した上で、わかるようになったら、対応する日本語を教えるというやり方を取っていました。またわかる内容をYくんに自分の言葉で説明させることを通して、内容を十分に理解できているかどうかの判断もできます。Yくん本人も自分で説明できるようになったことにとても嬉しい様子に見えました。

2学期目に入って、Yくんは母語での学習支援のほか、日本語指導も受けるようになりました。内容は主に日本語基礎です。母語で教科学習を中心にして支援を行いました。1対1で細かく説明や確認ができるので、算数と理科も取り出し支援でやることになりました。Yくんは1学期目と比べ、勉強意欲が高くなり、書くことに対する抵抗も減ってきたように見えました。

母語を活用した学習支援において課題はまだたくさんありますが、今回7ヶ月間の学習支援を通して母語の力を借りて、子どもの教科内容の理解にプラスの影響があることがわかりました。しかし外国人散在地域での母語保持・伸長は簡単なことではないので、母語支援者、学校、保護者との連携体制の構築の重要性を感じました。またこれから日本語習得や教科学習においては母語の役割や活用の必要性が広く認識されるべきではないかと考えます。

●HANDSnext vol.25(2020年3月13日)



## 支援会議、『教員必携』、だいじょうぶnet